宮沢賢治とカーライル『衣服哲学』

大沢正善

宮沢賢治の宗教的精神は『法華経』に支えられたが、それに思想的観念を与えたのは、「大霊」に基づく超絶主義思想を展開した『エマーソン論文集』だった。[1] しかし、そうした思想が文芸として表出されるためには、さらに何らかの契機が介在したのではないだろうか。その一つとして、カーライル『衣服哲学』の影響を検討したい。

賢治には「衣服」に関わる童話が多く、「ビヂテリアン大祭」（大12頃）では「元来きものといふものは（中略）、カーライルの云ふ通り、装飾が第一なので」と言及し、「労農詩論三講」でも「カーラヰルの詩的定義／詩とは音楽的なる思想である。」（伊藤忠一筆録、昭元）と言及し、影響をうかがわせる。「黒ぶだう」（大12頃）における「きものばかり」の部屋の設定にその影響を示唆[2]しておいたが、最近ようやく、中村晋吾が「ビヂテリアン大祭」などに即して衣服による社会的差異の描き方を記号論的に考察した。『衣服哲学』をどのように受容し表出したかという、影響の経緯や実態は未だ充分に解明されていない。

一、賢治の『衣服哲学』受容

トーマス・カーライル（一七九五―一八八一）はイギリスの評論家・歴史家で、ゲーテやエマソンと交流し、先験的な理性に拠って普遍的な精神に到達しようとしたドイツ観念論と、その普遍的精神を「大霊」（Over-soul）と呼んだ超絶主義思想（Transcendentalism）と、自らの半生を重ね合わせた「衣服哲学」（Sartor Resartus）を連載（一八三三―三四）し、エマソンの推奨で先にアメリカで刊行（三六）した後、イギリスで刊行（三八）し注目さ

れた。『フランス革命史』(French Revolution、三七)では革命を「腐敗し、老朽せる権力に対して、獄舎から放たれた無政府主義が起した公然たる暴力に依る反逆」[3]であり、衣服の交替であると捉え、『英雄と英雄崇拝』(Heroes and Hero-Worship、四一)では、超絶的な感性を行為に表現した英雄が世界史を牽引してきたのであり、市民革命と産業革命によって神を恐れず拝金的になった、この民主主義の時代にこそ英雄が待望されると主張した。日本における紹介は早く、明治十四年(一八七一)には植村正久が紹介し、二十六年に十二文豪の一人として評伝『カーライル』(平田久、民友社)が刊行され、土井晩翠が『英雄論』(明31)と『衣服哲学』(明42)を翻訳し、夏目漱石がロンドン留学中に訪れた体験を「カーライル博物館」(明38)に記し、大正末期には柳田泉訳『カーライル全集』(全九巻、春秋社)が刊行されるなど、広く読まれた。

『衣服哲学』の邦訳は大正年間までに以下の四種が確認される。土井晩翠訳『鬼臭先生衣裳哲学』(明42・4、大日本図書)、高橋五郎訳『衣服哲学』(大6・9、玄黄社)、柳田泉訳『サータア・リザータス』(カーライル全集4、大13・1、春秋社)と新渡戸稲造の講演筆記録「Sartor Resartus講義」(「英文新紙」明40・2〜40・12、十二回、のちに増訂されて『新渡戸先生講演衣服哲学』昭13・3、研究社)。柳田訳巻頭の「解題」に「『サータア・リザータス』に三種、『英雄崇拝』に四種程の国訳がある」とあるのに相当する。また、注釈書『研究社英文学叢書6 SARTOR RESARTUS』(土居光知注、大11・1・10)もある。土井訳は生硬で注もなく、高橋訳にはていねいな注もあり読みやすい。柳田訳は詳細な割り注が読むのに煩瑣でもある。新渡戸訳は一高校長時代に要所を引用しながら講述したもので、賢治の目には入らなかったであろう。ただ、新渡戸は同郷の先輩であり、彼の『農業本論』(札幌農学校学芸会蔵版、裳萃房、明31・8)は盛岡高等農林にも所蔵され、カーライルを講じたことは知っていたであろう。賢治が読んだテクストは、大正十二年までの刊行という点で土井訳と高橋訳にしぼられ、後述するように、土井訳を読んだようである。岩手大学図書館に収められた盛岡高等農林の蔵書には五種いずれも確認されない。その後、石田憲次訳(岩波文庫、昭21・7)、宇山直亮訳(「カーライル選集」I、昭37・5)などがある。本稿では土井訳に拠り、漢字表記を新字体に直し、引用には頁数を付し、場合によって高橋訳や石田訳や土居注の原文を参照する。

『衣服哲学』[4]の原題「Sartor Resartus」とは仕立て直された仕立屋を意味し、原文では「Die kleider, ihr Werden und Wirken (Clothes, their Origin and Influence): von Diog. Teufelsdröckh, J.U.D. etc. Stillschweigen und Cognie.

Weissnichtwo, 1831」、石田訳に拠れば、「衣服、その起源と影響、法学博士ディオゲネス・トイフェルスドレック著。シュティルシュヴァイゲン株式会社。ヴァイスニヒトヴォー、一八三一年。」というドイツ語の原著を、「私」が翻訳・編纂し、仲介してくれた「ホイシュレッケ宮中顧問官」から得た資料をもとに博士の伝記を付した、という体裁をとっている。土井訳では「衣服――その起源及作用、法学博士ダイオゼニス鬼臭先生著、一千八百三十一年無何有郷、黙々堂書店発行」と記される。「ディオゲネス」とは古代ギリシアの犬儒派の哲学者と同じ名であり、「トイフェルスドレック」とはドイツ語で「悪魔の糞」を意味し、その名の胃腸薬があったという。土井訳では一貫して「鬼臭」、高橋訳では「トイフェルスドロエク」と呼ばれている。「ヴァイスニヒトヴォー」とはどこと指示できない「無何有郷」でありユートピアの代名詞になっている。「シュティルシュヴァイゲン」は沈黙を意味し、「ホイシュレッケ」はバッタやイナゴを意味し、土井訳では「蝗虫」と呼ばれている。このように架空の人物と著作を仕立てて、カーライル自身の半生と思想を語っている。三巻から成り、第一巻はこの書物の成立事情と原著の特徴を語り、第二巻は「鬼臭先生」の伝記を語り、第三巻は原著の思想を展開させ、「鬼臭先生」の近況を語っている。ちなみに、第三巻第三章には「物言ふは銀である、もの言はぬは金である」（317）という知られた格言が記されているが、「スキッツルランドの彫文の言へる如く」に後接している。

その〈衣服哲学〉とは、人間は神の世界の中に一時的に衣服に纏われて顕在化する存在である、ということだろう。それは巻頭に近く、石田訳に拠れば「心ある人は繰返して言ふかも知れない、それでは、凡ての組織（テイシュー）の中の最も偉大な組織、唯一つの本当の織物（テイシュー）――即ち毛布その他の織地の衣服組織が科学によつて全く看のがされてゐるのはどうしたことかと。衣服組織は人間の霊魂がその一番外側の蔽いや上張りとして着用するもので、彼の他の組織はすべてその中に包括され保護され、彼の全能力はその中に働き、彼の全自己はその中に「生き動きまた在る」のである。」と示され、また、「凡ての自然と人生とがただ一つの衣、「時の織機」にて織られた、また常に織られつつある、「生ける衣」に過ぎぬといふ考、此処にこそ全衣服哲学の輪郭がありはせぬか。」と示されている。土井訳では「一切の織物中の織物、唯一の真の織物――即ち毛織物或は布帛の織物、人間その外皮として被覆として穿つ処のもの、その他一切の織物が中に含まれ蔽はるゝ処、――即ち衣服が全く科学に看過されしは何故ぞ、黙想家は反復之を問ふであらう。」（3）、「一切の自然一切の生命は唯衣服である、時劫の機に常に識（ママ）らるゝ活衣服であると――衣服哲学全体の綱領はこゝにあらずや」（297）と、やや簡略

化されている。土井訳は全体にその傾向がある。石田訳には明示される「生き動きまた在る」とは、聖書の「われわれは神のうちに生き、動き、存在している」（使徒行伝第17章）に拠り、「時の織機」にて織られた「生ける衣」とは、ゲーテ『ファウスト』（第一部「夜」）の地霊の歌に拠り、土井訳でも後に「此の外見堅実なる世界は（中略）「フアウスト」劇中地霊の云ふ所即ち神の生ける衣装に過ぎぬ。／「生命の潮の中、行為の嵐の中、／（六行略）／斯く轟き渡る時劫の織機に／われ織る神の活ける衣を」。」（76―77）と訳出されている。スウィフト『桶物語』（一七〇四）の「この地球を見よ、しからばあなた方はそれが非常に完全な流行服であることを見いだすであらう。或る人々が陸地と呼ぶものは緑の縁取りをした上衣であり」、「人間自身小さい上衣、或は寧ろあらゆる附属品のついたひと揃ひの衣裳でなくて何であらう。」といった記述に拠るとも指摘[5]されている。

すでに指摘した「ビヂテリアン大祭」（大12頃）の「元来きものといふものは、東洋風に寒さをしのぐといふ考も勿論ですが、一方また、カーライルの云ふ通り、装飾が第一なので結局その人にあった相当のものをきちんとつけてゐるのが一等ですから、私は一向何とも思ひませんでした。実際着物は自分のためでなく他人の為です。」とは、原文で「The first purpose of Clothes, as our Professor imagines, was not warmth or decency, but ornament.」という記述に拠ったのであろう。土井訳では「先生が想像する如く衣服の第一の目的は暖かみにあらずして装飾であつた。」（52）、高橋訳では「先生の想像する所では、衣服の最初の目的は温暖でも無く、羞恥でも無く、実は装飾であつた。」とある。「first」の訳語に注目すれば、土井訳に拠った可能性が高い。土井訳には同じ一頁に「複本」「郵便脚夫」（26）という賢治の用語もあり、高橋訳では前者に相当する訳語はなく、後者は「郵便使」と訳されている。また、「マルサス人口論」を援用した「動物を喰べないぢゃ食物が半分になる」からという菜食反対論は、「マルサスの門下」だった「宮廷顧問蝗虫君」の「人口減少の制度」と題する架空の論文に言及していた（328）ことにも拠るだろう。

一方、昭和元年二月の羅須地人協会の集合において、賢治は「労農詩論三講」（伊藤忠一筆録）を講じ、その「労農詩の本質」の冒頭に「カーラキルの詩的定義／詩とは音楽的なる思想である。」とある。それに相当する箇所は『衣服哲学』に見あたらず、『英雄と英雄崇拝』の「わたくしとしては、詩は韻律を持ち、その中に音楽が流れており、一つの歌である、という古い平俗な詩の区別に非常な意味のあることを感ずる。（中略）音楽的な思想は、そのことの最も奥深い核心に徹し、その奥底の秘密、すなわち、その中に秘め

られているメロディを発見した人によって述べられた思想である。[6]」（第三講「詩人としての英雄」）という記述に拠るだろう。ただし、後続して「ワーズワースの定義／科学の表情。知識の呼吸である。／アーノルドの定義／詩とは人生の批評である。／イエーツの定義／詩人とは其の中に無限性を有し、そして作品に無限性を与へるものである。」とあるので、他の文芸概論的な文献に拠った可能性もある。「労農詩論三講」中の「労農詩の表現に就いて」は「●外芸術／→／●内芸術」と説明されているが、それは『衣服哲学』における、「土より成る機械を以て勤めて地に勝ち之を人間の領とする」「第一労働者」と「精神的に欠くべからざるもの、日常の食ならぬ生命の糧の為に働く」「第二種の人」の、「その内外の努力が合一するとき、呼びて芸術家と称する時、単に俗界の技手たるのみならず、霊感ある哲人」であり、「農民聖人」である（330―332）、という文脈での説明だったのだろう。

『英雄と英雄崇拝』からの影響の可能性も略述しておく。第一講「神としての英雄」で紹介される「韻文エッダ」と「散文エッダ」は、「北守将軍と三人兄弟の医者」（昭6・7）が成立までに散文形と韻文形が試みられたことを連想させ、「オウディンのルーン文字」への言及は、「雲とはんの木」（大12・8）に登場する「手宮文字」を連想させる。第二講「予言者としての英雄」とは「竜と詩人」（大正十年八月の日付があるが、十五年以降に推敲された）における「あしたの世界に叶ふべきまことと美との模型をつくりやがては世界をこれにかなはしむる予言者」という歌の一節を連想させる。

賢治が最初にカーライルの名を記したのは大正十二年頃の「ビヂテリアン大祭」においてであるが、「衣服」に関する記述が最初に集中的に現れたのは、「1922.1.-」とメモされた「花椰菜」と「あけがた」においてであった。「花椰菜」では「私はふっと自分の服装を見た。たしかに茶いろのポケットの沢山ついた上着を着て長靴をはいてゐる。そこで私は又自分の役目を思ひ出した。」とか「私は花椰菜の中ですっぱだかになってゐた。」と描かれる。「あけがた」では「獣医の有本」と「さまざまの友だちの区分キメラ」の「二人がしきりに着物のはなしをした。」、「いきなり霧積が入って来た。霧積は何かぴかぴかする金襴のやうな羽織を着てゐた。」、「霧積は今度はおれの着物を笑ひ出した。」と描かれ、推敲されて「そして眼をさました。」とある末尾の段落が削除された。十年一月に家の改宗を迫って八月まで出郷し、東京で筆耕などをしながら国柱会の布教活動に携わったり上野の帝室図書館に通ったりしていたが、古着商の家督という立場へのいらだちもあった。夢の記述の中に「自分の役目」を模索する賢治の無意識がうかがえる。「第一、人は霊にして、無形の紐にて万人に繋がるゝ。第二、人は此の事実の有形

の標象たる衣服を着る。」ことから「社会は衣服を以て其基とする。」(85)という記述や、赤裸に固執することを批判する第一巻第九章「赤裸宗」や、「朋友諸君よ、古衣を尊敬せぬ人を信用せらるゝな。」(351)と記す第三巻第七章「古衣」にも触発されたであろう。「花梛菜」には「一九二二・一二」という日付も付され、「一九二一」の誤記と思われるが、いずれにしても、十一年以降の〈衣服哲学〉の受容はめざましく、以下に、可能性のある限りにおいて提示する。

二、「幽霊」と「標象」

『衣服哲学』は第三巻第八章「自然的の超自然」で、「大霊」(Over-soul)に基づくエマソンの超絶主義思想から一歩を進めた。「神秘を蔽い隠すあらゆる妄影中の最深なるものは一切を抱容する二大幻影即ち空間と時間とである」(380)が、「時間空間は神でない。神の所造である、神にとりては宇宙六合みなこゝである久遠尽未来みな今である」(383)。「思想の範疇たる空間時間」が「霊性的なる黙想を非常に圧制」(384)しているので、「「時」の幻影をふり払へ」(387)と主張する。この章の冒頭は「鬼臭先生が哲人となるのは此の「自然的超自然」と題する篇からである。」(371)と始まり、「彼は人生を絶えず凝視したので、遂にこれを包める被覆が一枚々々に解け去りて今その内真の聖の聖なるものの現出するを彼は恍然として眺むるのである。故にこゝで正しく「衣服哲学」が「超絶的」になるのである。」(371―372)と続く。賢治が影響を受けた『エマーソン論文集』も上巻の冒頭「歴史論」を「あらゆる個人を通して一貫せる一個の心あり。」と始め、「円環論」で「人の生命は自ら発展し行く円環」であると補った[7]が、「大霊」の発現としての神秘的な形而上学にとどまっていた。カーライルは、カントが形而上学を克服するために純粋理性を批判し、時間と空間の先験的(アプリオリ)な直観形式を検討したことを踏まえて、独自の時間空間論を展開したが、純粋理性を正しく批判できずに「思想の範疇たる空間時間」を「二大幻影」として否定し、エマソンから遠くはない。賢治もカントの『実践理性批判』に触れ[8]たり「第四次延長」という観念を導入したが、「宇宙意志」(書簡252c、昭4頃)に固執して批判哲学を自分のものとはしなかったようである。

「超絶的」な「自然的超自然」の思想を連想させる賢治の言葉として、『春と修羅』「序」(大13・1)の「わたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です／(あらゆる透明な幽霊の複合体)」という一節が知られる。そこに「宇宙意志」を介在させれば、わたくし(あるいは人間)は宇宙意志によって一時的に存在を仮定されて点滅する照明であり衣服であると解釈され、

〈衣服哲学〉に重なる。人間を「現象」と捉えて時空の中に相関化した記号論的発想が評価されている。第一巻第十章「純理」には「賤しき論理学の見る処人は何物か、衣服を着て万物を喰ふ両脚獣である。純理の見る処何物か、霊魂である、神聖なる化現である。」(92)と記され、「人」を「神聖なる化現」(divine Apparition)と見ている。両者は思想的にも近似するが、その「化現」したものが、第三巻に入ると「幽霊」と表現されていることが注目される。先に引用した「「時」の幻影をふり払へ」のまもなく後には、「好博士自身が一の幽霊、望次第に確な正しい幽霊にて、其他また百万ばかりの幽霊が彼の傍に街頭を歩いて居つたではないか。我は更にまたこゝに曰はう。「時」の幻影をふり払へと、(中略)我々は肉体となり現象となつて後ち再び空に散じ無象に返る霊ではないか。」(388)と記され、「我々」と「現象」と「幽霊」が同一化されている。大正十年の帰郷後まもなく書かれたとみられる「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」は、早速「ばけもの世界」を舞台にした。後に触れるように登場人物たちへの影響も大きい。右の「再び空に散じ無象に返る」とは、「農民芸術概論綱要」(昭元)の「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう」という一節を連想させる。ここでの「幽霊」は「Ghost」、「幻影」は「illusion」、「現象」は「Appearance」、「霊」は「Spirits」の訳語である。そのまた少し後には「我々は中におの〳〵未来の幽霊を持つばかりでなく、現在真の幽霊たることを思へば、実に恐しく実に不思議ではないか」(389―390)と記され、「影や恐ろしいけむりのなかから/蒼ざめてひとがよろよろあらはれる/それは氷の未来圏からなげられた/戦慄すべきおれの影だ」(「未来圏からの影」大14・2)という詩句を連想させる。「未来の幽霊」は「a future Ghost」の訳語で、高橋訳では「将来の幽霊」と訳されていることも、賢治が土井訳に拠ったと判断した理由の一つである。高橋訳でも「Ghost」は「幽霊」と訳されている。

「序」詩とその周辺をさらに検討する。「現代の人々斯く聯関すとすれば之に劣らず緊密に時代と時代とが聯関する。」(358)、「諸時代は労する人類の日々の如く、また死と生とは人を眠らしめ人を覚まして新に進ましむる暁鐘暮鐘である。父の為したることを子はなすことを得、享受することを得、併し又わがなすべき業もある。かくて万物生育して前進する、芸術、制度、言説何れも完成したるものはない只何時も完成しつゝある。」(360)といった記述の、「時代と時代とが聯関」する「諸時代」は、「序」詩の「これら新世代沖積世の/巨大に明るい時間の集積」を連想させる。「何れも完成したるものはない只何時も完成しつゝある。」(nothing is completed, but ever completing)とは、「農民芸術概論綱要」の

「永久の未完成これ完成である」を連想させる。「人間のみならず、人間のなす処見る処皆絶えざる完成の活動をなす。」（53）という記述もある。「父の為したることを子はなすことを得、享受することを得、併し又わがなすべき業もある。」とは、父との確執を克服する力になったであろう。「骨肉恩愛とこしへに我を離れて死し去りて、その凄愴の墓は次第に遠ざかる道標の如くあなたに見えて（中略）正に我々が神秘的に神と共に此処にあると等しく亡友は尚神秘的に神と共に此処にある、（中略）之は信ぜねばならぬ、之は知解する事は出来ぬ。」（383―384）とも記され、親友保阪嘉内との訣別や妹との永訣を克服する力になったであろう。

不充分だったにしろエマソンから一歩を進めたカーライルは、第三巻第三章「標象」でも別な一歩を進めた。「所謂標象なる者の中常に多少明瞭に直接に無限を現はし無限を啓くものがある、無限は有限と混じて象を具して宛然達し得べきやうになさるゝ。（中略）宇宙は只神の一大標象に過ぎぬ、更に又進んで曰はゞ、人は神の標象にあらずして何か。」（318―319）と考え、「一切の標象は正に衣服なること」（396）と記して、一種の記号論を展開したのである。大正十一年一月の「花椰菜」と「あけがた」において、賢治の「衣服」は「自分の役目」を象徴する記号にとどまっていたが、十二年に入ると、その記号性は多くの作品で意識的に利用されていく。「ビヂテリアン大祭」でカーライルに言及してまもなく、大祭への参加者は、「燕尾服もあれば厚い粗羅紗を着た農夫もあり、綬をかけた人もあれば、スラッと瘠せた若い軍医もありました。（中略）もう私たちは国と階級、職業とその名とをとはず、たゞ一つの大きなビヂテリアンの同胞として、「お早う、」と挨拶」する。中村晋吾は、彼らの多様な「衣服」が人種や民族に拠るのではなく、ビヂテリアンの教義という文化的差異によって設定されていることに注目し、さらに「「異派」「異教徒派」なるもの自体が転覆されるに至るこの作品の結末は、一度「衣装」をめぐる描写によって形成された分類や序列を、大祭という場において再構成するものである」と考察[9]した。こうした「「仕立て直し」の作業」に注目する視点から、「馬の頭巾」（大10頃）「バキチの仕事」（大12頃）「氷河鼠の毛皮」（大12・4）「大礼服の例外的効果」（昭6以降）などについても考察した。

「一切の標象は正に衣服なること」とする「標象」観は、「言語は思想の衣服と称せられる。されど寧ろ言語は思想の肉衣即ち身体である。余は想像がこの肉衣を織るといふた、又現に織るではないか。比喩は彼の材料である。能く言語を検せよ、少数の根源的要素（自然の音の）を除かば、是一切皆比喩にあらずして何か。」（103）とする、言語観としても展開された。「名は重大である、否、殆ど一切である。名は此世に出現する『我』の周囲に纏はるゝ最初の衣

服である、（中略）すべての普通の言語のみか、科学及詩其物も考へると正当なる命名に過ぎぬ。」（125）、「いつも前時代の解釈は陳腐となり無用となる。蓋世紀より世紀にかけて始終曰ひ回し方を換ゆると云のは人間の性質であってどうしても止むを得ない」（274）といった記述は、記号の既成の内容に安住するのではなく、記号の表出的な可能性を積極的に肯定している。賢治童話を彩る命名群はこうした記述に触発されたのではなかったか。そして、『注文の多い料理店』（大13・12）の「新刊案内」冒頭の「イーハトヴは一つの地名である。」という命名も発想させたかもしれない。「イーハトヴ」は「イーハトーヴオ」とも「イーハトーボ」とも記されたが、鬼臭先生の著書『衣服――その起源及作用』の出版地は「無何有郷」であり、その原語「Weissnichtwo」の末尾「wo」と「ヴオ」「ボ」が重なることも興味深い。「いつも前時代の解釈は陳腐となり無用となる」とは、「銀河鉄道の夜」（第三次稿、大14頃）でブルカニロ博士が「頁一つが一冊の地歴の本にあたる」「地理と歴史の辞典」をジョバンニに示し、「紀元前二千二百年」の頁と「紀元前一千年」の頁を比べて、「だいぶ、地理も歴史も変ってるだらう。このときには斯うなのだ。」と語る場面を連想させる。

また、「一切科学の精髄は衣服哲学中に存在する。」（105）のであれば、『衣服哲学』の「標象」観は科学にも敷衍でき、「序」詩の「有機交流電燈」といった科学的比喩も『衣服哲学』に拠るかもしれない。鬼臭先生は産業革命以後の「機械家」と「功利主義」を批判する（340）が、「彼等を性質相反なる電池を有して広大比類なき二個の電気機械（社会機関に運転さるゝもの）と呼ばう、賤民主義は消極、しやれ主義は積極、一は毎時国民中の一切の積極電気（即ち金）を吸引して之を自己のものとし、他は等しく力ある消極（即ち飢）の為に忙はしい。」（420）と、「電気機械」という近代科学を比喩として援用していた。さらに、「嗚呼自然よ、おまへは大気といふ、世界といふ、おまへの大きな発酵桶や化学実験室の中で何たる発酵や実験をやることであるか。」（272）という比喩も、ブルカニロ博士の「その実験の方法さへきまればもう信仰も化学と同じやうになる。」という言葉を連想させる。

三、鬼臭先生の伝記

『衣服哲学』は鬼臭先生の〈衣服哲学〉を紹介し、鬼臭先生の近況と伝記に言及していて、思想の書であり物語の書でもある。賢治はその鬼臭先生にまつわる物語からも大きな影響を受けている。

まず、編者が鬼臭先生にかつて面会した頃の彼の風貌と身分から見てみる。彼は「塵に塗れて磨り耗らした綏き衣服を着、終日塵芥

廃物中に座し、考へながら煙草を吹かす一小個体」(20)だったという風貌で、「特に独逸大学に見る所の偏物として畸人として其朋友間を往復」し、「「一般事物の教授」であるが彼は決して講義をしない」(22)し、「緑鴨亭に夜々出現する外、無何有郷の人々は彼を見ること少」(24)なかった。編者は「蝗虫君」の仲介で好事家と有識者が集まる「緑鴨亭」で彼と歓談したことがあり、「多少先生の家庭に入ることを得た。是は「幻影街」中最高の家の天井裏で無何有郷の頂点と呼ばれ」(25)、その窓からは「市中の生命の循環」(26)が眺められたという。そして、最近、パリの七月革命(一八三〇)の三日目に緑鴦亭で少しの話をしてその五日後に姿を見せて以来(434―436)、「鬼臭先生は既に無何有郷に見えぬ、見た処では有ゆる場処に居らぬ。」(433)という。こうした人物像は、やはり大正十年の上京中に始まる賢治のゲーテ『ファウスト』愛好と重なって、何人かの事物や宇宙の真理を追求する博士像を生んだようだ。

その最初は、「1921.11.-」とメモされた「図書館幻想」の「ダルゲ」であろう。「おれはやっとのことで十階」の「巨きな室」でダルゲに面会する。「ダルゲは灰色で腰には硝子の蓑を厚くまと」い、「せいの低いダルゲが(中略)巨きな窓から西の空をじっと眺めてゐた。」おれは「白亜系の砂岩の斜層理について。」と声をかけると「ダルゲは振り向いて冷ややかにわら」う。この短編の原型が「東京」ノートに無題で、「われはダルゲを名乗れるものは(ママ)/つめたく最后のわかれをかはし/白き砂をはるかにはるかにたどれるなり/その三階より灰いろなせる地下室に来て/われはしばらく湯と水とを呑めり/(以下六行略)」と記され、上京中の当時三階建ての帝室図書館での一コマを描いているだろう。ただし、「ダルゲ」とはおそらく、ドイツの医師で仏教学者で『仏教の世界観』(原著は大元刊、邦訳は大15)を著したP・W・ダールケに由来するだろうが、上京中にはその経歴を知ることはなかったと考えられる。[10] 昭和三年頃にノートを編纂する際に、「「幻影街」中最高の家の天井裏」の窓から「市中の生命の循環」(26)を眺め、世界の図書館を遍歴した鬼臭先生を想起しながら、原型のスケッチに登場していた人物をダルゲと名づけ、他のスケッチと併せて短編化したのであろう。あるいは、東京での再会を願い叶わなかったらしい保阪嘉内像が反映しているかもしれない。上京中の「1921.6.-」とメモされた「電車」と「床屋」の、前者には「メフィストの息子さん」とからかわれる「大学生」が登場し、後者には「イデア界」を口にする「図書館員」が登場し、ゲーテやプラトンを愛好する段階にあった。鬼臭先生像に触れることで、賢治は宇宙の真理を追求するファウストと彼の魂と交換にそれを援助する悪魔的なメフィストフェレスを統合した人物像を手に入れたのであろう。それは、「ペンネンネンネンネン・

ネネムの伝記」の「フゥフィーボー博士」、「ビジテリアン大祭」の「トルコの地学博士」「神学博士ヘルシウス・マットン博士」や、「ひかりの素足」（大11中頃）「学者アラムハラドの見た着物」（大12頃）を経て、「銀河鉄道の夜」（第三次稿、大14頃）の「ブルカニロ博士」に至ることになる。

「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」は「ばけもの世界」の物語であり、主人公のネネムは「世界裁判長」にまで出世するが、隣接する「人間世界」に誤って「出現」してしまい、裁判長を辞職する。この「出現」も、鬼臭先生が「一種の自在服或はフォルチューナスの帽子を借りて飛び歩る」き、「神恵に依り欧羅巴の一都会に、私宅教員として暫らく影を隠せば、次には順礼者としてメッカの近隣に顕れ」（223）、「譬喩の言を以て曰へば彼は霊ではないが霊化したのである。」（224）とか、「六月の夜半に北欧岬端の寂寞中に鬼臭先生が何処よりともなく出現したことは一層真実明白である。」（258）と記されていることに重なる。「出現」にとどまらず「影を隠」すことも、早速「蛙の消滅」（大10～11）が書かれ、「紫紺染について」（大13～14）の末尾では「お役人方」が見送ろうと「玄関まで行ったときは山男はもう居ませんでした。」し、「北守将軍と三人兄弟の医者」（昭6・7）の末尾でも「バーユー将軍」は「どこにも形が見えなく」なり「仙人になった」とされることに重なる。「ひかりの素足」では一郎と楢夫の兄弟が吹雪で仮死し、「うすあかりの国」で「白くひかる大きなすあし」の「立派な瓔珞をかけ黄金の円光を冠」る人に会う。その国には「一冊の本の中に小さな本がたくさんはひってゐるやうな」本を集めた博物館があり、「銀河鉄道の夜」を準備する。「学者アラムハラドの見た着物」で、「アラムハラドは長い白い着物を着て学者のしるしの垂れ布のついた帽子をかぶり低い椅子に腰掛け」、十一人の子供に事物の性質や人間の本質について問いかける。「小岩井農場」でも、パート九で「私」の左右に「巨きなまつ白なすあし」の「ユリア」と「ペムペル」が同伴し、パート一で「オリーブのせびろ」を着て「馬車にのぼってこしかけ」ている「農学士」は、「もうよほど世間をわたり／いまは青ぐろいふちのやうなとこへ／すましてこしかけてゐるひとなのだ」と描かれる。この「こしかけ」る姿勢は、「五十万以上の両脚無毛動物は今横臥して夜帽を冠りて痴夢を見る。（中略）されど予は彼等一切の上に座りて只星と共に居る。」（29）、「此の微々たる世界の狗竇は何物ぞ、爰に呻き座はる汝は何者ぞ」（263）などと、鬼臭先生が世界を眺める際に度々示した姿勢である。このような細部からも影響を受けたらしい。「銀河鉄道の夜」（第三次稿）でブルカニロ博士がジョバンニに示した「地理と歴史の辞典」は、「造化の書籍と人がよく曰ふ、なるほど之は一の書籍で（中略）大賢者も漸くこゝ

に一行を読み得れば幸である。（中略）かゝる応用法又は料理法等を集めし大書籍、之はいつか全く理解さるゝだらうが、しかし此宇宙は之等の書籍以上の物なることを大概の人は夢にも知らぬ。」（377―378）といった「書籍」に近い。またブルカニロ博士の風貌は「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の瘠せた大人」と描かれるが、その「帽子」も「昔如意帽を持てる人があつた、彼之を冠りて某処に行きたいと思へばすぐそこに行けた、是の徳に拠りて彼は空間を制[ママ]服し空間を亡して仕舞うた。彼にとりてはどことといふことなく皆こゝであつた。」（381）という「如意帽」なのであろう。

他にも賢治作品の設定や人物像に多くの影響が考えられる。第二巻では、鬼臭先生の伝記を十章にわたって記述しているが、誕生からして奇瑞である。「鵞が池」村のアンドレアス・フッテラルと細君グレッチェンには子供がなかったが、ある日、外套を着た立派な容子の人が来て、「いかに御夫婦、非常に貴い財を御身に委托しやう、能く〳〵注意してお使用なさい、高い報酬か重き罰金を付けていつか取り戻し申さう」（119）と言って、籠を置いて去った。その中には赤ん坊がいて、ダイオゼニス鬼臭と名づけられた。彼は、「あらゆる天地経緯の衰微崩壊の神秘」をまだ知らない「休息の香味」（129）を味わいながら育ったが、「受動的性情」と「印度的性格」（145）を示し、中学時代は背が低くいじめられた。十二歳で中学三年の時に、「或る静なる日の午後クーバッハの岸に座つて淙々とその流るゝのを見た時、（中略）こゝに又水流の世界的大循環の一脈がある、其循環は大気の動脈に因て天地と共に連綿続き去り続き来るのである。」（147―148）と感じ、同じ頃、養父が死んで（153）養母から自分の来歴を知らされ、「二重に孤児となつた」（155）と感じたという。大学時代には図書館に通い、「殆ど一切の問題一切の科学を殆ど一切の文明国の語で流暢に勉め読んだ」（165）。大学卒業後、「法学者」（177）になったが仕事は見つからない。人間を愛し恐れ、冷淡と風刺のために非難されたが、数少ない友人のツーグッドの紹介で「美的茶話会」に参加し（198）、そこでブルーミンという女性と知り合い互いに恋した。しかし、無職の彼は失恋（210）し、「癲狂院に入るか、魔的の詩を書くか、自殺するか」（213）しかないところ、「静かに順礼の杖をあげて水陸の巡回を始め」（214）た。ある日、「山嶽は彼に取つて新規ではない、されど爰ほど山嶽が威厳と雅致とを併せたことは無い。その岩石は地質学者が太古系統と称するもので、磊落峨々として屹立」し、「植物の繁盛に適して、苔蘇に蔽はるゝ絶壁は緑陰蓊欝の上に突出し、白亜の農舎は樹木に蔽はれて永遠の花崗石の周囲に群がる。」（218）土地を訪れた時、夕景の中を結婚式に向かう四輪馬車が近づき、中にはツーグットとブルーミンが乗っていた（221）。『エルテルの悲哀』以後流行していた「叙

景をなさう」（make a Description、222）とする「風光探求病」（Viewhunting、221）を実践しながら、「一国より他国に、一境遇より他の境遇に移る、或は消え或は現はれて」、「世界漫遊」（223）を続けた。

その後の彼は、「恐怖ではない、呻く悲嘆ではない、憤怒である、眼光欄然たる反抗」のために、「永遠の背理」（243）に陥り、それは「見よ汝は父が無い、汝は捨てられた、宇宙は予悪魔の有である。」（243）と言い、彼は「予は汝の有でない、自由である、而して永遠に汝を憎む。」（244）と答えた。この時から「回転す可き一定の中心」（244）を得て、「霊的新生の日、奇々怪々なる火焔の洗礼の日」（244）を迎えた。「都城市府殊に古代のもの」を眺め（246）、古戦場を訪れて「戦争の真正なる旨意と結果」（251）を考え、「沈静の時に、己れの悲哀より転じて、複雑なる世界を眺め、頗る適切に発生する事件を記し留めた」（253―254）。各国の「公立図書館に学」（254）び、「バビロンの廃蹟中に烟草を吹かしたこともある。支那の万里の長城も見た」（255）。「偉人は彼の神聖なる天啓書の神来の本文（或は語り或は行ふ者）である、その篇章は時代より時代に渉りて、完成せられて歴史といふ。」ような「大いなるシルレル及更に大なるゲーテに侍り」（256）、「バイロン卿、法王パイアス、道光帝、及白蓮教会」や「ナポレオン」（257）とも交流した。「六月の夜半に北欧岬端の寂寞中」（258）に出現した時には、「熊の如」き「露国の密売商」に出会い、拳銃を出して退散させた（260）。やがて、輝く「軒宿、昴宿、大狼星、大熊星」を見ながら「此の微々たる世界の狗賓は何物ぞ、爰に呻き座はる汝は何者ぞ」（263）と感じる「冷眼視の中心」（264）にたどりつき、「苦しき夢は徐々に過ぎ去りて余は今新天地に目ざめた。徳行の初歩「捨身」は幸にも遂げられた、我が心眼は開かれた」（269）と感じ、「身中の「我」は破砕されねばならぬ。（中略）歓楽を愛せず神を愛せよ、是ぞ正に永久不滅の真理」（278）に回心する。

賢治はこうしたエピソードの多くから触発されたようだ。赤ん坊の鬼臭先生がフッテラル夫妻に託された時の、「高い報酬か重き罰金を付けていつか取り戻し申さう」という約束は、「貝の火」（大10頃）でホモイが宝珠を託され、「あなた様のお手入れ次第で、この珠はどんなにでも立派になる」と告げられた経緯と似ている。幼少期の「休息の香味」とは、『春と修羅』（最初の章中）とその「第二集」（二九、五三）「第三集」（七三三）の「休息」を連想させる。内容的に似ているわけではないが、くり返し描かれたことが注目される。第二巻第九章には「余はこゝに休まう、余は行程に疲れ人生に疲れた」（269）とあり、続く第二巻最後の第十章も「小憩」である。「第二集」（二九）では「暗い積乱雲」が「古い洞窟人類の／方

向のないLibidoの像」に喩えられている。ちなみに、第三巻最後の第十二章は「告別」であり、「第二集」に同題の詩（三八四）がある。十二歳の時に近くの川に「水流の世界的大循環」を感じたことは、「雁の童子」（大13頃）で、雁の生まれ変わりで人間に育てられ、「雁のすてご」と呼ばれていた童子が、十二歳の時に天の童子を描いた壁画の前で、「お父さん。お許し下さい。私はあなたの子です。この壁は前にお父さんが書いたのです。」と言って死んだことを連想させる。二人とも、奇瑞によってもたらされ、十二歳で世界と運命の神秘に気づく。「十二歳」とは「雪渡り」（大10）や「風の又三郎」（昭6〜8）で子供から大人へ移行する境界の年令である。大学卒業後に無職だったことは賢治の眼を引いたであろう。ブルーミンとの恋愛と失恋は早速「烏の北斗七星」（大10）「シグナルとシグナレス」（大12）の恋愛に利用されたかもしれず、「春と修羅　第二集」（三二〇）の「ローマンス（断片）」や文語詩「ロマンチェロ」を連想させる。失恋後の山嶽の漂泊は、「マグノリアの木」（大12頃）で「諒安」が「険しい山谷の、刻みを渉って行き」、「インドラの網」（大12頃）で「私」が「ツェラ高原をあるいて行」く姿を連想させる。北極圏で「露国密売商」に出会う場面は「氷河鼠の毛皮」（大12）を連想させる。「永遠の乖離」から「永遠の真理」に回心する姿は、「青森挽歌」（大12・8）末尾の「みんなむかしからのきょうだいなのだから／けつしてひとりをいのってはいけない」という回心を連想させ、「回転す可き一定の中心」とは「水仙月の四日」（大11）などにおける宇宙の回転軸への興味を連想させる。なお、失恋後の「癲狂院に入るか、魔的の詩を書くか、自殺するか」という思いは、夏目漱石『行人』の「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない。」（「塵労」三十九）という、主人公の述懐に似ている。

四、編纂という手法など

鬼臭先生の伝記からは、以上のようなエピソードの影響にとどまらず、表現の様式に関わる影響も考えられる。

まず、伝記という様式自体に注目したい。伝記に入る前の章では、「本書が自僭する如き人生哲学は人格より起りて人格に語るが故に、（中略）彼の伝記が哲学的兼詩的に書かれ哲学兼詩的に読まるゝ以前には其意義を発揚することを得ぬ。」（106―107）と、伝記の効用が強調されている。賢治は「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」（大11初頭か）を主人公の「独立」「立身」「巡視」「安心」「出現」の五章から構成し、最初の長編作品となった。その後、改稿されて「グスコーブドリの伝記」（昭7）に転生した。「蜘蛛となめくぢと

狸」の原型は大正七年頃、現存草稿は十年頃とされているが、十二年頃に冒頭を「三人の伝記をすこしよく調べてみませう。」などと書き込んだ一枚に差し替えている。それぞれ悪行ゆえに地獄に落ちた教訓物語から、三人の人生物語に転生させようとしたのだろう。賢治が多くを学んだ『法華経』はたしかに寓意的なエピソードに満ちているが、それらに思想的な一貫性はあっても物語としての脈絡はない。大正七年夏に「蜘蛛となめくぢと狸」「双子の星」「貝の火」が弟妹に語り聞かせられたとされるが、それは現在の形ではなかったであろう。その後、ドイツ語の勉強にアンデルセン「絵のない絵本」の原著が読まれたりしているが、十年まで童話は残されていない。高等農林時代の同人誌「アザリア」に発表した「「旅人のはなし」から」（大6・7）や「復活の前」（大7・2）は断章的なアフォリズムに近く、十年までに試みられた「家長制度」（初稿は大5頃）や「秋田街道」（大9・9）などは習作的なスケッチにとどまる。上京中に「高知尾師ノ奨メニヨリ／法華文学ノ創作」（「雨ニモマケズ手帳」昭6）を決意したようであるが、鬼臭先生の伝記から断章を脈絡づけ長編化できる様式を学んだともいえよう。

また、編纂という手法にも注目したい。鬼臭先生の伝記は、蝗虫君から「天秤宮」（110）・「巨蟹宮」（151）・「猟人宮」（156）・「双魚宮」（176）・「摩蝎宮」（196）・「宝瓶宮」（216）と呼ばれる「六箇の大なる紙袋」（110）が届き、その中の「哲学的兼神学議論、蒸気機関に関する片々の思想、予言可能論等」と「長き自伝的叙述」（111）が交じった文書から編纂された。ちなみに六つの「宮」は、黄道（地球から見て太陽が一年間に動く天球上の経路）に配された十二宮のうち秋冬を中心に選ばれていて、天文学への嗜好がうかがわれる。ところが、その「六箇の大なる紙袋」中の文書は、「結合がない、認むべき聯絡がない、甚だ不必要に冗漫に細か」で、「先生は選択秩序を全く知らぬらし」（111）く、「毎日毎夜編者は碧眼鏡を掛けて読難い草書より不思議な書類を読み解き」、「対照校訂し」「同類相合せしめ」「一塊づゝ集め」「巧みに粘着」（112―113）して編纂されたことになる。「欧州の中世時代に達し又十七世紀の終に至る」（63）衣服の流行を略述した第一巻第七章「雑録兼歴史的」もある。賢治も、地質のフィールドワークに従事してデータの記録と整理をくり返したであろうように、中学時代から書きついだ短歌を今日「A」（大9頃）と「B」（大10～11）と呼ばれる「歌稿」に編纂し、中学・高等農林時代のスケッチを「初期短編綴等」（大10～11）として綴じ、「東京」ノート（昭3頃）に何度かの東京体験に関わる短唱を整理し、「東京」ノートの後半と「文語詩篇」ノート（昭5頃）に中学時代からの年月ごとの履歴を記し、最晩年に「文語詩稿五十編」「文語詩稿一百編」（昭8）を編纂した。こうした姿

勢は、「或る農学生の日記」（昭2頃）や「風の又三郎」（昭6〜8）などで日付が飛ぶことを許したかもしれない。「セロ弾きのゴーシュ」（昭6〜8）でもゴーシュと動物との練習は最初の四日間を描いて「それから六日目の晩」の演奏会に場面は飛ぶ。人間の日常的な暦に依拠するのではなく、自然や宇宙の運行に委ねられたかのような世界を展開している。影響は根深かったようだ。

さらに、鬼臭先生の思想と伝記を編纂した「編者」の介在にも注目したい。賢治の「ビヂテリアン大祭」は参加者の「私」が報告する体裁をとり、改稿された「一九三二年度極東ビヂテリアン大会見聞録」（昭6頃）では報告者は「筆者」と名乗り、「或る農学生の日記」も「ぼくは農学校の三年生になったときから今日まで三年の間のぼくの日誌を公開する。」という体裁をとる。「黄いろのトマト」（大12頃）は「博物局十六等官／キュステ誌」、「ポラーノの広場」（昭2頃）も「前十七等官　レオーノキュースト誌／宮沢賢治訳述」という体裁をとる。ひいては、「鹿踊りのはじまり」（大10）などにおける風から聞いた物語という設定にも発展し、「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。」（『注文の多い料理店』「序」大13）という思想を導き、「なんのことだか、わけのわからないところもあるでせうが、（中略）これらのちひさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほったほんたうのたべものになることを」願うことにして、物語作者としての未熟を補うことができたのであろう。

そして、鬼臭先生の「風光探求病」（Viewhunting、221）への興味を、賢治が風景から触発された心象を逐次的にスケッチした「心象スケッチ」という手法に重ね合わせたくなる。「道程の細記、天気の観察、絵の如き小品文（心裡無象の筆者が消えざる隠顕墨にて正しく記したが）是等は何処にも出で来たらぬか。恐らく全く紛失したのであらうか」（109）とか「叙景をなさう」（221）と記されている。「絵の如き小品文」の原文は「picturesque Sketches」ではあるが、高橋訳では「好風景を求めて四方を漫遊する病」「描写しやう」「写生図画」とある。「心裡無象の筆者が消えざる隠顕墨にて正しく記した」の原文は「in indelible sympathetic-ink by an invisible interior Penman」であり、土井訳からは「interior Penman」といった語意をたどりにくかっただろう。ただ、鬼臭先生が失恋後に山嶽を漂泊して描写した風景は、「マグノリアの木」や「インドラの網」の「こゝろの峯々」の描写を連想させる。「心象スケッチ」という手法も、物語のリアリティを手法の誠実と「おしまひ、あなたの」鑑賞に委ねてしまうもので、賢治の文芸様式を物語や小説の成熟には導かなかったといえよう。

ほかにも、賢治作品における『春と修羅』における「二つの心」や「二重の風景」といった「二」の嗜好は周知のことであるが、童話の登場人物が対照的に描かれることが多いことにも注目したい。例えば「土神ときつね」（大12頃）で、「髪もぼろぼろの木綿糸の束のやう眼も赤くきものだってまるでわかめに似、いつもはだし」の土神は、「大へんに上品な風で」「仕立おろしの紺の背広を着、赤革の靴」を履くきつねを、美しい樺の木をめぐる嫉妬から殺してしまう。その対照は、「ガドルフの百合」（大12頃）でガドルフの夢に登場する「一人は闇の中に、ありありうかぶ豹の毛皮のだぶだぶの着物をつけ、一人は鳥の王のやうに、まっ黒くなめらかによそほってゐました。」という対照としてくり返されている。[11] 第三巻の第十章第十一章にわたって言及される「人間の二小部分」「即ちしやれ者と裁縫師」（398）の対照に触発されたのかもしれない。「しやれ者」とは「霊魂精神財嚢身体の各官能は勇ましくも唯一個の目的――即立派に衣服を着用することに捧げらるゝ」（399）人間であり、「勇ましくもその観念を実行し、特殊の服装をなして他の面前に現はれ、衣服の永遠なる価値を証明する者として、その生ける殉教者として歩み出す。吾人は彼を詩人といふ」（400）とされ、「裁縫師」とは「生理上特別の種族にして人間にあらず」とか「裁縫師の悲」（423）に罹りやすいとか誤解されるが、「社会の美なる建設、帝王の外套、法王の袈裟、即赤裸と乱離とより吾人を政体国民協同の人類に組織する所以のものは（已でに證明せられて否むべからざる如く）皆唯裁縫師の創作ではないか。一切の詩人一切の霊界の師は比喩的裁縫師の一種にあらずして何か。」（425）とされている。途中で「しやれ宗と奇異なる対照をなして」いる「賤民」あるいは「繿縷宗」（410）の解説に脱線してしまうが、「裁縫師」は貧しい「賤民」と誤解されていると主張したいのだろうか。「しやれ者」である詩人も一種の「裁縫師」であるとされてしまい、混乱するが、文明や文化を情熱的に創造するタイプと地道に社会の機構を裁縫するタイプを対照しようとしたのであろう。そうした対照は、登場人物の布置を事件の展開の中で再構成するというより、性格の対照の中に劇的葛藤をあらかじめ用意しておく仕組みなのである。

比喩的な表現も、すでに指摘したように『衣服哲学』に特有のもので、「（比喩はどうしても彼に欠くべからざるものであるが）かう曰ふ。『爾の生涯は是迄、現代にあり得べき最完美の生涯ならざりしか、初は燃ゆる如き青春の熱中、恰も寝かしておいた田畝の初収獲の如く、中には尊い穀物もあり沢山の雑草もあった。是が実際的並に精神的不信仰の旱の下に皆枯死した、（以下略）』」（267）とある。賢治も「ビヂテリアン大祭」で「キリスト教の精神は一言にして云はば神の愛であらう。神天地をつくり給うたとのつくるといふやう

な語は要するにわれわれに対する一つの譬喩である、表現である。」と記し、「青木大学士の野宿」（大10〜11）で「第百八十へきかいよび面の下がいたいと、なるほど、（中略）お前さんのからだは大地の底に居た時から慢性りょくでい病にかかって大分軟化してますからね。」と、鉱物の劈開を病気に喩えている。思想を盛り込みがちな賢治童話を、生硬な教訓に陥ることから救ったことであろう。

さらに踏みこめば、土井訳の「鬼臭先生」「蝗虫君」という呼び名には、悪意というよりユーモアさえ感じられる。また、しゃれ者である「アイウェ伯爵カキクケ公爵は新流行の服を着け」ても「目の無い世間は卑俗の用事に逐はれて顧みる処なく通り過ぎる。」（402）と記されていて、「アイウェ伯爵カキクケ公爵」の原語「Lord Herringbone」は杉綾織（ヘリンボーン）に由来するが、地口めいた訳語になっている。鬼臭先生はユーモアに溢れた人物とはいえないが、「諷刺滑稽の傾向」（292）が指摘されていて、「幼児の教養訓練」を甘藍の生育に比喩して「剽軽者」（135）と評されたり、哄笑する姿が一度だけ印象的に描かれている。鬼臭先生が「大いなる諧謔」（44）で知られるジャンポールの話を聞いていた時、「曇りし容貌中に長へに若く耀くアポロが現はれた、而して彼は馬市場の全群嘶く如く笑ひ出した、――涙が頬を流れた、煙管は高く上がった、脚は空を蹴た、高く長く抑へられぬ笑である」（44）。「ビヂテリアン大祭」でも末尾に近く、「ヘッケルのやうな風をした眉間に大きな傷あとのある人」の言動に「テントの中は割けるばかりの笑ひ声」に包まれる。「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」で「フゥフィーボー博士」が「プウルウキインイイの現象」を講義するという命名も楽しく、「大きなあくびをやりましたので、ノートはスポリと先生に吸ひ込まれてしまひました。」といった描写もユーモラスである。他の様々な由来も考えられるが、ユーモアは鬼臭先生に似た博士や山男に付与されることが多く、賢治のユーモア感覚にさえ影響したかもしれないのである。

五、賢治文芸の青年期

賢治文芸における『衣服哲学』の影響を、可能性のある限りたんねんに拾い集めてみたが、思想面においても物語面においても様式面においても思いの外に大きなものであった。いわば、賢治の宗教的資質が、詩や童話にふさわしい文芸的個性に仕立て直されたといえよう。最後に、受容と表出の経緯を大正十年の上京以前にも遡っておきたい。

賢治は七年三月に盛岡高等農林を卒業し、以後、古着商であった家の店番をすることも多くなり、「古い布団綿、あかがついてひや

りとする子供の着物、うすぐろい質物、凍ったのれん、青色のねたみ、乾燥な計算　その他。」（書簡159、大9・2頃）などと近況を報告し、判然とはしないが「衣服」への関心を覗かせていた。その半年前には「幽霊が時々私をあやつって裏の畑の青虫を五疋拾はせる。どこかの人と空虚なはなしをさせる。正に私はきちがひである。（中略）万一日本の秩序がみだれ青い幽霊が限りなく奔りまわり、肥った成金氏の血みどろの死骸、恐れて顔色もないみにくく悲むべき女等、これらが私の周囲になるときがあれば私は一言も言はず、（以下略）」（書簡154、大8・8）と記して、「幽霊」の用例も見られる。『衣服哲学』は「幼児の教養訓練」次第で「病的なる黄色の甘藍或は青き食用の甘藍が生ずる。」（135）とか、「甘藍を常食として」いるせいで「裁縫師の悲」を生じるというのは「妄説」（423）だと記していた。「甘藍」とはキャベツのことで、「幽霊」が「裏の畑の青虫を五疋拾はせる」と記した書簡の少し後に「玉菜に虫が集れば構はず」（書簡157、大8・秋）と記し、「ビヂテリアン大祭」に「甘藍（キャベヂ）を一つたべるとその為に青虫を百疋も殺してゐることになる。」と記していることは、同じ文脈にあるようだ。それにしても〈衣服哲学〉の観念性とは遠い、「私は暗い生活をしてゐます。うすくらがりのなかで遙に青空をのぞみ、飛びたちもがきかなしんでゐます。」（書簡143、大8・4）といった心情を表現した用例である。七年の年末に上京し翌年三月まで妹トシの看病にあたる傍ら、東京で人造宝石の製作販売で身を立てる方途を探ったり、帝室図書館に通ったりしている。その間に『衣服哲学』に出会ったのだろうか、帰郷後に店番をしながら『衣服哲学』を読み進めたのだろうか。

「大正八年五月」の日付のある「猫」は、「暗闇で毛を逆立ててパチパチ火花を出すアンデルゼンの猫」の話を持ち出し、「毛皮といふものは厭なもんだ。（中略）陰電気のためかも知れない。」と説明するが、「毛皮」は衣服の一種である。「大正八年秋」の日付のある「うろこ雲」は、「小学校の窓ガラスがさびしく光りひるま算術に立たされた子供の小さな執念が可愛い黒い幽霊になってじっと窓から外を眺めてゐる。」などと描いている。これらは大正十年から翌年に掛けて推敲清書され、「初期短編綴等」として綴じられたにしろ、影響の端緒を見ることができるかもしれない。「東京ノート」の「一九二一年一月より八月に至るうち」には、「赤き幽霊／黄いろの幽霊／あやしきにごりとそらの波／あるひはかすけき風のかげ。」という断章があり、これらも暗鬱な心情の表現にとどまる。『春と修羅』（大13・4）になると、「真空溶媒」（大11・5・18付）は「画かきどものすさまじい幽霊が／すばやくそこらをはせぬけるし／雲はみんなリチウムの紅い焔を上げる」と記し、「小岩井農場」（パート四、大11・5・21付）は「みんなさくらの幽霊だ／内面は

しだれやなぎで／鶏いろの花をつけてゐる」と記し、五月の風景と「内面」が対照され、「幽霊」は意識的に集中的に用いられている。「真空溶媒」は二四八行、「小岩井農場」は六つのパートで五九一行にわたり、積極的な心情もうかがえる。十年の上京中にか帰郷直後に再読し、「幽霊」を観念として理解し始めたのかもしれない。その最初の現れが「花椰菜」と「あけがた」であり、記号として利用できるようになったのが「ビヂテリアン大祭」であり「序」詩だったのかもしれない。

『衣服哲学』の影響が八年頃まで遡りうるとすれば、当初のそれは断片的で消極的なものであり、「幽霊」の用例も暗鬱な心情表現にとどまっていた。十年の上京は、七年末の上京より長く期するものがあったためか、文芸的な点火があったのだろう。「一ヵ月に三千枚も書いたときには、原稿用紙から字が飛び出して、そこらあたりを飛びまわったもんだと話したこともある」[12]という弟の証言を、賢治の実感として受けとめたい。その後は、暗鬱な心情に〈衣服哲学〉の観念と鬼臭先生の物語を与えられ、「心象スケッチ」と称する詩や童話として積極的に表出されていく。「銀河鉄道の夜」（第三次稿）を頂点として、羅須地人協会の活動に入る頃までは、独創的な部分もあり細部の借用もあり長編を試み、受容の迅速性と表出の集中度はめざましい。しかも並行して、『華厳経』や『中論』などの仏典、ゲーテや柳田国男の文芸、ヘッケルやアレニウスの科学、ベートーベンやドヴォルザークの音楽などを受容し表出していたのである。賢治の文芸はまさに、「永遠の乖離」から「冷眼の極」を経て「永遠の真理」へと回心し、「青年の精神にはすべての能力が芽出す、孰か主であり真であるかまだ分らぬ。また常に新人は新時代に於て新境遇にある、彼の行路は前人の模擬ではなく性質上独創である。しかも亦内外能力相適すといふのが極めて稀である。」（173―174）ような、青年期を迎えていたのではなかったか。

（1）拙稿「宮沢賢治と『エマーソン論文集』」（「文芸研究」第百集、一九八二・五）、信時哲郎「宮沢賢治とエマーソン―詩人の誕生―」（「比較文学」一九九二・三）、水野達郎「「心象スケッチ」の成立とエマソン受容」（「宮沢賢治研究Annual」第七号、一九九七・三）参照。

（2）拙稿「黒ぶだう」解説（「国文学」臨時増刊「宮沢賢治の全童話を読む」、二〇〇三・二）

（3）工藤好美『カーライル』（研究社英米文学評伝叢書、研究社、一九三八・二）168頁

（4）土井訳の表題は『衣裳哲学』であるが、以下、一般的な『衣服哲学』を用い、その思想を特定する場合には〈衣服哲学〉を

用いる。

（5）（3）126頁

（6）『カーライル選集Ⅱ　英雄と英雄崇拝』（入江勇起男訳、日本教文社、一九六二・七）120頁

（7）（1）の拙稿参照。

（8）「カント博士」『新宮澤賢治語彙辞典』（原子朗編著、東京書籍、一九九九・七）参照。カントは『純粋理性批判』（一七八一）で神などの形而上的存在を否定したが、『実践理性批判』（一七八八）ではそれを実践理性の要請として承認した。賢治がカントをどのように受容したかは不明である。

（9）中村晋吾「仕立て直される「菜食信者」―「ビヂテリアン大祭」における「衣装」をめぐって―」（「日本文学」二〇一二・九）。他に「様々なる衣裳、可視化される世界―宮澤賢治「ビヂテリアン大祭」をカーライル「衣裳哲学」から読み解く―」（『コンテンツ文化史学会2010年大会予稿集』二〇一〇・一一）、「賢治童話における衣服の役割―身体・関係・例外的効果―」（「早実研究紀要」第46号、二〇一二・三）参照。

（10）秋枝美保『宮沢賢治の文学と思想』（朝文社、二〇〇四・九）121頁参照。

（11）拙稿「「土神と狐」とその周辺―「修羅」の克服―」（「宮沢賢治研究Annual」第一号、一九九一・三）参照。

（12）宮沢清六『兄のトランク』（ちくま文庫、一九九一・一二）89頁

『衣服哲学』原文の目次とその土井訳と土井訳の頁数を示しておく。

[BOOK Ⅰ]

CHAPTER 1 PRELIMINARY（序言）1

2 EDITORIAL DIFFICULTIES（編輯の困難）9

3 REMINISCENCES（回想）17

4 CHARACTERISTICS（特性）36

5 THE WORLD IN CLOTHES（着衣の世界）47

6 APRONS（前垂）58

7 MISCELLANEOUS-HISTORICAL（雑録兼歴史的）63

8 THE WORLD OUT OF CLOTHES（脱衣の世界）70

9 ADAMITISM（赤裸宗）80

10 PURE REASON（純理）89

11 PROSPECTIVE（前途の予想）99

[BOOK Ⅱ]

CHAPTER 1 GENESIS（発端）115

2 IDYLLIC（田舎ぶり）129

3 PEDAGOGY（教育）144
4 GETTING UNDER WAY（帆を揚げて）171
5 ROMANCE（小説）190
6 SORROWS OF TEUFELSDRÖKH（鬼臭先生の悲哀）213
7 THE EVERLASTING NO（永遠の乖理）230
8 CENTRE OF INDIFFERENCE（冷眼の極）244
9 THE EVERLASTING YEA（永遠の真理）264
10 PAUSE（小憩）286
11 TAILORS（裁縫師）422
12 FAREWELL（告別）428
[BOOK Ⅲ]
CHAPTER 1 INCIDENT IN MODERN HISTORY（近世史上の一大事）300
2 CHURCH-CLOTHES（教会衣服）309
3 SYMBOLS（標象）315
4 HELOTAGE（奴隷）328
5 THE PHŒNIX（不死の霊鳥）336
6 OLD CLOTHES（古衣）346
7 ORGANIC FILAMENTS（有機的繊維）355
8 NATURAL SUPERNATURALISM（自然的の超自然）371
9 CIRCUMSPECTIVE（回顧）392
10 THE DANDIACAL BODY（しゃれ者）399